1本保残区の林況

2本保残区の林況

3本保残区の林況

無除伐の場合、ツブラジイの一人勝ち！

技術開発実施報告・計画

様式　2

森林技術センター

課　題	２５ 天然林の優良林分造成の実験林設定　－除間伐－					開発期間	平成９年度　～　平成３８年度		
開発箇所	去川国有林 ２５３は小班	担当部署	森林技術センター	共同研究機関		技術開発目標	３	特定区域内外	○
開発目的 （数値目的）	天然林において有用広葉樹の発生率が高く生長旺盛な林分において、用材率を高めるための残存木の選木本数管理（枝下高、通直性）のための除間伐の適期について検証し、有用広葉樹を造成する育成天然林施業の指標とする								

年度別実施報告	２１年度　実施報告		２２年度　実施計画書
	実施内容	普及指導	
平成９年度 ①試験地設定（位置表示）４区 ②除伐作業（本数別に３区域） ③設定木現況調査（通直性･胸高径･枝下及び樹高） ④林分構成調査（本数･材積） ⑤試験地の表示（看板） ⑥除伐功程（人工数）調査 平成１３～１４年度 ①試験地管理（歩道整備） 平成１５年度 ①成長量調査 平成１６年度 ①試験地調査②除伐③試験地管理 平成１７年度 ①除伐②試験地管理 平成１９年度 ①成長量調査②林分構成調査 ③試験地管理	１　実施事項なし	本試験地の林齢は、２０年生であり、２・３本保存区については既に本数調整の時期迎えているが、さらに用材率を高めるためも経過を観察しながら、本数調整の適期を検証するべきであると考える。	現在の調査対象３４樹種のうち、現時点でで成長の優勢な樹種及び南九州における代表的な高木性広葉樹の７種に変更する。 １　成長量調査 （２６年度・３１年度実施予定） ２　試験地管理
技術開発委員会における意見			

技術開発実施報告・計画

様式　2

森林技術センター

課　　題	２５ 天然林の優良林分造成の実験林設定　－除間伐－					開発期間	平成９年度　～　平成３８年度		
開発箇所	去川国有林 ２５３は林小班	担当部署	森林技術センター	共同研究機関		技術開発目標	３	特定区域内外	○
開発目的 （数値目的）	天然林において有用広葉樹の発生率が高く生長旺盛な林分において、用材率を高めるための残存木の選木本数管理（枝下高、通直性）のための除間伐の適期について検証し、有用広葉樹を造成する育成天然林施業の指標とする								

年度別実施報告	２０年度　実施報告		２１年度　実施計画書
	実施内容	普及指導	１　試験地管理
平成９年度 ①試験地設定（位置表示）４区 ②除伐作業（本数別に３区域） ③設定木現況調査（通直性･胸高径･枝下及び樹高） ④林分構成調査（本数･材積） ⑤試験地の表示（看板） ⑥除伐功程（人工数）調査 平成１３～１４年度 ①試験地管理（歩道整備） 平成１５年度 ①成長量調査 平成１６年度 ①試験地調査②除伐③試験地管理 平成１７年度 ①除伐②試験地管理 平成１９年度 ①成長量調査②林分構成調査 ③試験地管理	１　実施事項なし	各本数区ともに良好な生育をしており、さらに用材率を高めるためにも、今後、経過を観察しながら本数調整の適期を見極めていく必要がある。 また、育成天然林造成のモデル林として試験結果の普及にも努めていきたい。	平成２１年度　中間報告課題
技術開発委員会における意見			

技術開発実施報告・計画

様式　2

森林技術センター

課　　題	２５ 天然林の優良林分造成の実験林設定　－除間伐－					開発期間	平成９年度　～　平成３８年度	
開発箇所	去川国有林 ２５３は1林小班	担当部署	森林技術センター	共同研究機関		技術開発目標	3	特定区域内外 ○
開発目的 （数値目的）	天然林において有用広葉樹の発生率が高く生長旺盛な林分において、用材率を高めるための残存木の選木本数管理（枝下高、通直性）のための除間伐の適期について検証し、有用広葉樹を造成する育成天然林施業の指標とする							

年度別実施報告	１９年度　実施報告		２０年度 実施計画書
	実施内容	普及指導	
平成９年度 ①試験地設定（位置表示）４区 ②除伐作業（本数別に３区域） ③設定木現況調査（通直性･胸高径･枝下及び樹高） ④林分構成調査（本数･材積） ⑤試験地の表示（看板） ⑥除伐功程（人工数）調査 平成１３～１４年度 ①試験地管理（歩道整備） 平成１５年度 ①生長量調査 平成１６年度 ①試験地調査②除伐③試験地管理 平成１７年度 ①除伐②試験地管理	1　生長量調査（通直性・胸高径・樹高・枝下高） 人工数：２８．０００人　　８月 2　林分構成調査（樹種別本数・材積） 3　試験地管理　　７月 人工数：３．０００人	1　施業種別の考察等 (1)ツブラジイ等の生長の早い樹種を早い時期に本数調整を行うことで、被圧されていた有用樹の生長を促進させることが可能である。 (2)さらに、ぼう芽を２，３本に調整し、有用樹のｈａ当たり本数を５千本程度に抑えることで、胸高直径、樹高、枝下高をバランス良く生長させることが可能である。 (3)今後の取り組みとして、２、３本保残区については、良好な生長をしており本数調整の適期であるが、さらに用材率を高めるため、本数調整の適期を見極めていきたい。また、１本保残区についても、本数密度及び枝下高からみても、同じく本数調整の適期を見極めていきたい。 (4)これらのことから、天然林優良林分を造成するための除間伐の優位性が裏付けられたが、引き続き除間伐の適期を見極めながら、その優位性についても、さらに究明していきたい。 　また、育成天然林造成のモデル林として試験結果の普及にも努めていきたい。 2　普及活動について 平成１９年度森林の流域管理システム推進発表大会において九州林政連絡協議会長優秀賞を受賞した	1　試験地管理
技術開発委員会における意見			